

## 研修報告 B班3グループ ビーチサンダル

### 明日の日本を支える人材育成のために私たちができること

#### 1. 社会背景

大学を取り巻く環境は、年々厳しくなり、入学者のほとんどを占める18歳人口は減少の一途を辿っている。また、大学へ入学しなくてもMOOCなどのツールを用いることで、専門知識の修得や最新の研究に触れることが可能になるなど、環境は常に変化し続けている。

さらに、社会や企業は、学生が在学中に「何を学び、どのような知識・技術を身に付けたか」だけでなく、挨拶やマナーなど社会人基礎力の習得した学生の輩出を大学に求めてくる時代になった。

このような社会背景のなかで、大学が学生に対してどのような力を与えられるかが問われる時代となってきた。

#### 2. 大学教育の現状

我々は、大学の役割を「明日の日本を背負う人材の育成」と考え、まずは“社会から学生に求められる力は何か”ということに焦点をあて、議論を進めた。その上で、“大学が学生に身につけて欲しい力”という観点から、二つのキーワードを取り上げ、現状を洗いだした。

##### ① 専門的な知識や能力の修得

社会が学生に求める力は、専門的知識を身につけていることである。しかし、学生の中には、自身の専攻分野のベースとなる基礎的知識や能力が定着せず、学修へのモチベーションが低下し、それが原因となって発展的な知識の修得ができなくなる場合がある。そのため、教職員が学生の学修意欲を上げるような環境づくりを行う必要がある。

##### ② 人格形成の教育

学生が社会に出る際、求められる能力のひとつに「社会人基礎力」がある。その中でも、社会の中で人間関係を構築するために必須となる人間性（おもいやり、一般的なマナー、礼儀など）が挙げられている。しかし、レポートや履修登録の期限を守れないこと、挨拶ができない、喫煙所以外での喫煙など、一般的なマナーを身につけていない学生が目立つ。大学を卒業した多くの学生が就職し、社会人として多くの人と接することから、大学は学生に最後の人格形成教育を行える教育機関であるといえる。

そのため、教職員は、学生にとって身近な社会人のひとりとして認識してもらえよう、教員と職員、職員と職員（部署間）での連携を図りながら、学生に対して、細やかな対応を行い、学生の人格形成教育に寄与する必要がある。

これらの二点の問題を解決するために、学生の情報を入学直後から個別に管理でき、学業・生活・就職活動の状況について総合的かつ多面的な学生支援が可能な「学生カルテ」の導入を検討した。

### 3. ICT を活用した学生の個別支援環境の構築

大学教育の現状で挙げた二点について解決策を検討し、その結果を要素ごとに別添の資料にまとめた。この図は学生を中心として、それに対する人格形成（上部）と、専門知識の修得（下部）について必要な施策をまとめたものである。我々は、この中から人格形成に係る部分に関する施策について、ICT を活用した具体的な手法として「学生カルテ」の導入を提案する。

この「学生カルテ」は、各部署の職員、教員が学生と接することで得た情報を入力することができ、その情報を各部署の教職員間で共有できるという仕組みである。これにより、今まで個々の部署や教職員が個別に保有していた情報を、学内全ての部署の教職員が把握することができる。また、学生と接するすべての教職員が集約された各学生の情報を把握することで、それぞれの学生にあったよりきめ細かい指導、サポートが可能になるということだ。たとえば、孤立している学生の早期の発見、対応や、学生支援部門が学生に対して行ったマナーに関する注意を教員の学生面談に反映させることなどができる。（※別添資料を参照）

ただし、この「学生カルテ」を導入する際に越えなければならないハードルが二つある。一点目は、「学生カルテ」を活用するのに適さない問題もあるということである。病歴等の特に管理に注意を要する個人情報については、学生本人の同意を得なければ全教職員が閲覧できるようにするべきではない。このようにこのツールが適さない問題に関しては、個別に対応策を講じる必要がある。二点目は、システムの普及・業務負担の増加といった運用上の問題である。導入時、職員は主観部署を設定し、各部署間で連携、調整をして円滑に導入できるよう努めなければならない。また、特に教員に対して普及を進めるためには説明会の実施、マニュアルの作成、サポートデスクの設置など万全な支援体制を整えなければならない。さらに、教務やキャリア、学費などの現行のシステムと連携を図り導入に係る業務負担を極力減らすことも必要である。

### 4. まとめ

教職員が大学の抱える課題を認識し、適切な施策を取っていけば、学生の人格形成及び学修意欲の向上を達成できる。座学だけでは身につかない、豊かな心と専門知識を兼ね備えた学生を社会に輩出できるだろう。そのような、日本を支える人材を育成できる現場で働いていることを意識しながら、日々の業務に励んでいきたい。



上段：人格形成, 下段：専門知識